

東京新聞

中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505 電話 03(6910)2211

育てよう! 科学魂

～日本科学未来館から～

「人の目で分かるのなら、人工衛星からでも分かるはず」。千葉大環境リモートセンシング研究センターの本郷千春准教授は

同大修士二年の時にそう考えた。それ以来、衛星で集めた作物や土壌のデータを活用した効率的な農業の研究に取り組んでいる。

学部時代は、葉や土の色と栄養素の実測値を突き合わせて野菜の栄養欠乏症を診断した。大学院生になると、この技術を衛星写真で使えないかと、リモートセンシング技術で農作物の栄養診断をする研究ができる



「植物欠乏症」の図録を手にする千葉大・本郷千春准教授

衛星使って効率的な農業

茨城県つくば市の農業環境で、根から砂糖ができる。こんな苦労もあった。現されるようになっていた。技術研究所に出入りした。北海道の畑では所によって場に溶け込んでいくうち、てん菜の収穫時期には根の本郷さんがここに出会った。土の色も根の大きさも違北海道具物のシンギスカンたのが、てん菜(砂糖大う。これをヒントに、衛星料理をこちそうになったうになった。これで、出荷根)。国内における砂糖原から見た土壌の色と実測しり、シンギスカンパーティや工場操業の計画、販売ル料の四分の三を占める作物 た水分、窒素分のデータをーに誘われるようになって

有利に進められる。「農家の負担を軽減したい」という夢に近づいた。思わぬ進展もあった。衛星データの解像度がよくな

組み合わせで解析、衛た。しかし本郷さんはマト星写真から土壌中の水ンやラムが大嫌い。最初はり、小さな畑でもこの技術分や窒素分を推定でき無理して食べていたといが応用できるようになっう。しかし二年もたつとた。稲作が盛んなインドネシアで、この技術を使う国

研究には農家の協力「実はシンギスカンは嫌い」が不可欠。「同じ畑なと言えようになった。そ際共同研究も始まった。

の葉の色は違つのはのころには、畑を見て回ら上空からのもう一つの目なせ」などと言って、なくとも、どこにどのくらは、今日も地上の畑に優し解析結果片手に農家にい水や肥料をやればいいか心強いまなざしを向けて意見や感想を聞いて回判断できるリモートセンシいる。(科学コミュニケー

た。「手を汚さず偉ソつに見ているだけでは農家の心はつかめない」といっ。

学び

Learning